

Günther-Dietz Sontheimer著 Pastoral Deities in Western India

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00000048

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



<書評> Günther-Dietz Sontheimer 著 *Pastoral Deities in Western India*

島 岩

0.1 はじめに

はじめてブネーに留学したのは、1974年の修士の頃で、もはや四半世紀も前のことになる。そのとき二年ちかくブネーに住んではいたのだが、サンスクリット語の勉強でせいっぱいで、目のまわりに日常的にくりひろげられるヒンドゥー教の世界とインド哲学で学んだヒンドゥー神学の世界との大きなギャップがとても気にはなっていたものの、サンスクリットの世界から一歩も出ることはなかった。

その後、このサンスクリットあるいはブラフマニズムあるいはインド哲学の世界から一歩はみだすことになったのは、1983年2-3月にカトマンドゥでネワール仏教の寺院の調査を行ったのが契機だった。調査の中での人との出会いや、文献中ではなくて目の前に見ることのできる宗教現象との直接的な関わりが、とても新鮮で面白かったのである。

そこで、カトマンドゥからの帰りにブネーに寄り、ブネーの旧市街の中心地に位置するシャニワール・ペートの全寺院を巡ってみることにした。その成果が [Shima 1984] だが、結局は全寺院を写真で紹介することしかできなかった。つまり、ヴィシュヌ神やシヴァ神をはじめとするサンスクリットの世界でおなじみの神々以外に、Viṭhobā や Mhasobā といった私の知らない神々もたくさんいることは分かったのだが、その一方では、マラーティー語ができないとこれらの神々について知ることはできないのだということも明らかになったのである。

その後、日本に戻ってから、ブネー大学からの留学生にマハーラーシュトラの聖地と神々について、いろいろと尋ねてみた。すると、実に様々な聖地と神々(それも私の知らないもの)がいることが分かってきた。その中でも主なものが、ブネーの村の神様 (grāmadevatā) としての Kasba Gaṇapati と Jogeśvarī、ブネー近辺の Aṣṭagaṇapati、Paṇḍharpūr の Viṭhobā、Tuljāpūr の Bhavānī、Kolhāpūr の Mahālakṣmī、Nāsik の Tryambakeśvar や Saptasringī、本書のテーマの一つともなっている Jejuri の Khaṇḍobā などであった。また、私のサンスクリット語の先生が後にそこのマハーラージャとなった Cincvad の Gaṇapti 寺院にも、興味をそそられた。そこで、1985年2-3月には、ともかくこれらの聖地と寺院を巡ってみることにしたのである。そのときの成果の一つが [Shima 1988] であるが、相変わらずマラーティー語の壁は厚く、また、文献に基づかずに非サンスクリットの宗教世界にどう踏

み込んでいけばいいのかということについても、よく分からないままであった。

ちょうどそんな頃に出会ったのが、これから紹介しようとするゾーンタイマーの著書の英訳だったのである。もちろん、この英訳のもととなった著書 *Birobā, Mhaskobā und Khaṇḍobā* は 1976 年発刊だし、ゾーンタイマーという人がそんなことをやっていることは、もう少し前から知ってはいた。だが、その頃はまだ、ドイツ語の本を一冊読むのは私にはなかなかの大仕事だったので、英訳が出版されてはじめて読んだという訳なのである。そして読んでみてはじめて、彼がインドロジストであることを知り、そして、口承伝承をテープにとって掘り起こしてそれをテキストとするような形で、インドロジーでも非サンスクリットの宗教世界に切り込むことができるのだと分かって勇気づけられたのであった(ただし、その一方では、彼が、サンスクリット語やパーリ語はもちろん、マラーティー語、カンナダ語、タミル語にも堪能であることを知り、意気消沈してしまったという面もあるのだが)。

なお私がゾーンタイマーさんに会ったのは、1988 年の 2-3 月に Jejurī の Khaṇḍo-bā 寺院での一度だけだが、彼が 1992 年 6 月 1 日にまだ 58 歳という若さで亡くなったことについては、[小磯 1992] を参照願うことにして、次に本書の内容の紹介に入ることにしたい。

0.2 所説の紹介

0.2.1 本書のテーマ・視角・方法・構成

本書は、マハーラーシュトラ州南部からカルナータカ州にかけて崇拝されている三つの神 *Birobā, Mhaskobā, Khaṇḍobā* を取り上げて、もともとは森林地帯の遊牧牧畜の民の神であったこれらの神々が、森林が切り開かれて農耕地帯が広がって行くとともに、村に定住する農耕の民の神々へと変容していった過程を、歴史的に明らかにしていこうとするものである。そしてその際に、このような考察のもととなる資料として用いられているのが、著者が 1967-72 年に、マハーラーシュトラ州南部とカルナータカで収集した *Dhangar* (現在では遊牧を行う羊飼と牧畜も行う農民を含む) の口承伝承なのである。

また著者が、口承伝承に基づいてこのような考察が可能であると考えた背後には、インドの思想および宗教に対する次のような見方がある。

- (1) インドの思想および宗教の場合には、部族の意識からサンスクリット文献に見られる高度な思想まで連続性が認められる。
- (2) インドでは、古代以来の伝統的な思想や習慣が、伝統的なインドの社会生活のコンパートメント化により(サンスクリット化やクシャトリア化にもかかわらず)現在でも残っている。そのため、
- (3) 多くの宗教的信仰の層が、プラーナばかりでなく大衆の信仰の中にもあって、思想や宗教が重層的な形態を形作っている。さらに、
- (4) その思想や宗教は、自然環境や社会環境により多く対応したものである。また、

(5) インドでは、そういった思想や宗教を担った基盤として、個人よりも社会集団のほう的重要である。

従って、このような見方に基づいて、森 (vana) から耕地 (kṣetra) へという自然環境および社会環境の変化にともなって、上記の三神の信仰が変容していった過程を、Dhangar という社会集団が伝えてきた口承伝承を資料をもとに、明らかにしていこうとするのである。

そのため、本書の構成も、信仰の変容の問題を扱う前提として、自然環境や社会環境および社会集団の特徴を説明することに、多くの紙面がさかれているような形になっている。

すなわちまず、「デカンにおける自然環境と遊牧牧畜集団の分布」(第一章)で、この地域が遊牧や牧畜に適し、さまざまな遊牧牧畜の民が住むところであることを述べ、次に、「古代タミル文学に見られる風景」(第二章)で、森と耕地という区分が古くから重要なものであり、またそれら個々の地域に固有の典型的な神々や信仰があったことを明らかにする。そして次に、「『大帝国』時代における風景」(第三章)では、Mhasvaḍと Kharsuṇḍī という二つの土地を例に、Sātavāhana、Vākāṭaka、Kalacuri、Cālukya、Rāṣṭrakūṭa 等の大帝国支配下の頃のこれらの地域の地理的・宗教的状况について説明している。そしてその上で、「森と遊牧牧畜の女神：その独立性と同化」(第四章)では、森の部族や遊牧牧畜の民のもともとは独立した女神たちが、さまざまな神々と同化していった様子が、Dhangar の伝える口承伝承の中に認められることが明らかにされるのである。

そののち今度は、このような信仰を担っていた社会集団へと話に移り、「森と遊牧牧畜の民：狩人、盗人、商人、苦行者」(第五章)、「森と遊牧牧畜の民：遊牧牧畜の集団」(第六章)に分けて、各社会集団についての説明が行われる。そして、それらの社会集団の中で本書との関係で最も重要な遊牧の民 Dhangar のキャンプを二つを取り上げて、そこでの宗教的行事の様子が、「遊牧の Dhangar のキャンプ二つの宗教的雰囲気」(第七章)において、具体的に記述されるのである。

次に「マハーラーシュトラの風景の統合：農業の広まり」(第八章)では、この地域が、これまで述べてきたような森と遊牧牧畜を中心とするものから、Devigiri の Yādava 朝、その後の地方の rājā や Nāik 支配の時代から、マラーター王国さらにはその後のイギリス植民地時代を経て、徐々に耕地と農業を中心とするものへと変化していき、それとともに、遊牧牧畜の民の神々もまたすべてのカーストの人々の神々へと変化していったことが論じられる。そして最後に、「Birobā、Mhaskobā、Khaṇḍobā 信仰の起源、構造、変容」(第九章)において、もともとは森の部族や遊牧牧畜の民の神(精霊)であったこれらの神々が、シヴァ神の乗り物 (vāhana) と関連づけられたり、女神と結婚したりすることなどを通して、もともとの性格の痕跡は残しながらも、現在見られるような信仰の広がりを持った神へと変化していったことが明らかにされていくことになるのである。

0.2.2 各章の内容紹介

第一章「デカンにおける自然環境と遊牧牧畜集団の分布」

この章ではまず、考察の対象となっている地域の自然環境が簡単に説明される。すなわち、降雨量が少なく、土地は固く耕作にはあまり適さず、せいぜいもちし栽培が主に行われている程度で、むしろ遊牧や牧畜に適しており、そのため多くの遊牧牧畜の民 (Dhangar, Golla, Kuruba, Iṭaiyan など) のいるところなのである。

第二章「古代タミル文学に見られる風景」

この章では、タミルの Caṅkam 文学では、風景 (地形) が五つ (部族の住む山岳森林地帯、遊牧民・牧畜農民の住む牧畜地帯、米作に適した川辺の地帯、砂漠地帯、海岸地帯) に分類されていて、そのそれぞれに典型的な固有の神がいるとされていることが紹介される (つまり、森林地帯と遊牧牧畜地帯と農耕地帯の対比という考え方は、昔からインド人の中にはあったというわけである)。そして、この森林地帯と遊牧牧畜地帯と農耕地帯の基本的な特徴に関しては、デカンの場合にも類似性が認められることが指摘される。

第三章「『大帝国』時代における風景：MhasvaḍとKharsuṇḍīの例」

この章ではまず、この地域が、Sātavāhana、Vākāṭaka、Kalacuri、Cālukya、Rāṣṭrakūṭa 等の帝国の支配下にあったところには、伝統的な牧畜地帯 (たとえばプネー東方地帯) と、米作地帯 (たとえば Karlā の仏教石窟のあたりの Māvaḷ) とに分かれており、この両者および森林・遊牧牧畜地帯の小さな町をつなぐ交易路があったことが指摘され、その交易路にあたる代表的な交易の町として Phaiṭhaṅ があげられている。次に、このような交易の町の例として、Mhasvaḍ (Sātārā と Paṇḍharpūr の中間あたり) と Kharsuṇḍī (Mhasvaḍ の南方 30 マイルほどで、Sangli District に位置する) が取り上げられて、その二つの町にまつわる伝承をもとに、森や遊牧牧畜地帯における信仰の起源とその発展の問題が以下のように論じられる。まず、Mhasvaḍ は、その名前が、Mahiṣavāḍā (水牛のキャンプ) に由来することからも分かるように、もともとは遊牧牧畜の民のキャンプであった。そのことは、牧夫 Gavḷī がいたことと、Mhasojī (Mhasā = 水牛から派生) を飼う Gavḷī たちの vāḍā (キャンプ) であったことを伝える土地の伝承からも明かである。また、Usmānābād District の Sonārī から移住してきた神 Kāḷbhairava (あるいはその化身としての苦行者・魔術師 Gosāvī) が、この地で水牛の悪魔 Mahiṣāsura = Mhasobā を打ち負かしたのだとも伝えられており、今でもこのあたり (たとえば Loṭevāḍī) では、Mhasobā と Gavḷī のつながりを伝える伝承が広まっていて、また Mhasobā 崇拝も盛んである。そして、このような土地の伝承を現在伝えている Dhangar はこの Gavḷī の後継者であって、Mhasācīvāḍī (母なる水牛のキャンプ) の Mhasvaḍ 近くでもともとは女神崇拝を行っていたようで、この地には Dhangar の男神 Birobā が定住する以前には女神がいたのだと伝えられているのである。Kharsuṇḍī もまた、最初は Gavḷī との関連が深く、Mhasvaḍ の Kāḷbhairav 神をこ

の地にもたらしたのは彼らであるとされている。そしてこの神はこの地で、この地方の七人女神（たとえば Baḷubāi 等）と、すなわち女神の地位へと高められた yakṣī（夜叉女）と結婚したのである。またこの神は、Sonārīの Kālḥairav と同一視されており、Gosāvīとの結びつきにも深いものがある。

第四章「森と遊牧牧畜の女神：その独立性と同化」

Mhasvaḍと Kharsuṅḍīの例から、これらの地に、M(h)asāi、Yeḷammā、Mariāiなどの七人の女神が存在していたことが分かるが、これらの女神は、ちょうど七人の水の妖精（āsarā）のように、今でもしばしば、木や森や石や水に住む rākṣasī（羅刹女）であるとされている。そして、これらの女神に関する Dhangar の伝承には、彼女たちがより強力な神への信仰の中に同化していった過程とそのあり方が読み取れる。たとえば、それは、Phaiṭhañ 近くの Kambaḷeśvar にいる七人の女神 Bhivayyā たちが、Dhangar の神 Dhuḷobā の七人の擬制的な姉妹とされるというような形で見られるものなのである。

またマハーラーシュトラでは、母神と聖なる子供に対する信仰が古くから認められるが、Dhangar の神 Birobā が、女神たちに森の中で出会ったときは捨て子で、拾われて女神 Mhākubāiの乳弟となるのはこのためである。

またこのような土地の女神が、他の有力な女神と同化して取り入れられていくという形も認められる。たとえば、M(h)ākubāi/Masāi/M(h)asā（水牛母）は、Paṇḍharpūr のもともとの女神で、口承によれば今でも Paṇḍharpūr の Diṅḍira 森のもともとの女神だとされているが、Viṭhobā 神の妻 Rukmiṇīと同化されていった。また Padubāi は、Viṭhobā 神のもともとの妻で、Rukmiṇīはこの Padubāiが変化したものなのである。さらにこの Viṭhobā 神と Padubāi女神は、Gavḷīや Dhangar と密接な関係にあり、Padubāiは Gavḷīが伝統的に住んでいた森林地帯では今でも、独立の女神で、家畜を守る女神として崇拝されているのである。

だがこのような女神の同化は、必ずしも常に調和的な形で行われるわけではなかった。たとえばそのことは、押し入ってきた Kālḥairav（彼は Gosāvīとして表され、シヴァ神の媒介者として行動する）が、強力な女神 Yeḷammā を打ち負かすという伝承の中に認められる。なおこの Yeḷammā は、Belgaum District では今でも、多くの信仰を集める有力な女神である。

また、Dhangar とともに押し入ってきた Mhasobā/Mahiṣa を打ち負かして殺した神に、図像的には Durgāmahīśasuramardinīとして描かれる Tukāiがいるが、彼女はときには、押し入ってきた遊牧牧畜の民の神 Mhasobā と結婚したのだとされることもある。このことはおそらく、Gosāvīたちが、Mhasobā を Kālḥairav に変え、Tukāiを Jogāi/Yogeśvarīに変えていったことによるのだろう。ともかくこのようにして、Mhasobā/Mhaskobā/Kālḥairav は、遊牧牧畜の民の信奉する単なる asura（阿修羅）から強力な神になったのである。たとえば、Loṭevādiや Vīr（Purandar Taluka、Puṇe District）では、彼は Jogāiと結婚して、Kālḥairav と同一視され、今日では女神よりも重視される存在となっているのである。そして、このような結婚を通しての同化の場合、神はたいてい二人の妻と結婚する。その

最初の妻は高いカースト出身でサンスクリット化されており、その地域の有力な集団とその宗教的観念に影響されている。一方、第二の妻は低いカースト出身でしばしば部族出身である。たとえば、遊牧牧畜あるいは森林の地域（たとえば Kharsunḍī や Biḷūr）では、Kālḥairav の最初の妻は Yogeśvarī/Jogubāī ではなく、遊牧牧畜の民の神 Bālāī/Bālūbāī だが、古くからの農業定住地 Vir では、Yogeśvarī/Jogāī が Mhaskobā/Kālḥairav の最初の妻とされているのである。同様に、Khaṇḍobā も二人の妻がおり、Khaṇḍobā と Bālāī/Bāṇāī の結婚はちょうど、Kālḥairav と Bālāī/Bāṇāī の結婚に対応するものとなっており、また、Khaṇḍobā の最初の妻は Mhalsā (Liṅgāyat カースト出身で、Yogeśvarī に対応する) だとされている。またさらに北の方に行くと、たとえばマディヤ・プラデーシュ (Pañcmāḍhi) の Cauragaḍh では、二人の妻は一つにとけあい、部族出身の妻が Pārvatī の身をやつしたものだとなっているような事例も認められる。

第五章「森と遊牧牧畜の民：狩人、盗賊、商人、苦行者」

多くの場所でこのデカンの地の信仰の根元には、「狩人の部族 Koḷī」(Mahādev Koḷī や Malhār Koḷī など) の存在が認められる。彼らは現在、Paṇḍharpūr 等では船頭であり、伝統的には商人と遊牧牧畜の民とが共存するところに最初に定住した人たちであった。この Koḷī と Birobā 神の出会いと彼らによるこの神の崇拜の起源については、Dhangar の口承伝承の中によく伝えられているところである。すなわち、諸王国の拡大とともに森林や遊牧牧畜地帯に押し入ってきた神によって打ち負かされた彼ら Koḷī の神（阿修羅）に残された道は、その信仰を保持し続けることができないとすれば、この押し入ってきた神に完全に同化するか、神の名前の一部となって生き残るかしかないのである。

「盗賊集団 Rāmośī」は部分的には南インドから移住してきており、Khaṇḍobā 神と密接な関係を持っている（なお、この Khaṇḍobā 神には、北インドの盗賊の守護神スカンダと共通の特質がいくつか認められる）。彼ら Rāmośī はその後、12 の balutedār（村の召使い）の一つとなり、隊商や村を守る機能を果たすようになっていったのだが、Dhangar の口承伝承では、今でも、Dhangar の羊や馬を盗む盗賊集団だとされている。また、Kaḷas (Indāpūr Taluka) 近くの Bābīr には、Gavḷī/Dhangar が信奉する有力な Bābīr 神がいるが、その起源は、Rāmośī の手による牛飼の少年の死に遡ることができる。すなわち、この少年は、死後、母によるシヴァ（むしろ Siṅṅāpūr の Mahādev）の崇拜によりシヴァ神の顕現したものとなり、その後現在でも、Gavḷī と Dhangar の祭 (jātrā) において崇拜されているのである。この Rāmośī は、現在では農民の中に吸収されているが、Khaṇḍobā に関する彼ら伝承の中には、自分たちが以前は Liṅgāyat であり、自分たちの司祭はバラモンではなくて jaṅgama であったとするものが残されている。すなわち、Khaṇḍobā 神自身が、ある Liṅgāyat Vāṇī（商人）の神格化されたものだと考えられているのである。このように、Khaṇḍobā 信仰は、マラーター時代以前には、Liṅgāyat や Rāmośī や遊牧牧畜集団と密接な関係にあったのである。

「商人カーストの Liṅgāyat」は、伝統的な遊牧牧畜地帯にだいたい住んでいる。彼ら商人が、森林地域を旅して、社会のすべての階層の人々や起源の知れない人々と接触する

には、平等の原理が必要とされることになる。そのため、森林地帯に住む者たちにとっては、放浪し乞食する生活を送る virakta (彼らは Liṅgāyat の中で通常司祭 jaṅgama より地位が高い) のほうが、農業定住地 agrahāra に住み風変わりな姿をしたシヴァ神を崇拝しているバラモンよりも近い存在となるのである (なお、Liṅgāyat のほうは、シヴァ神を liṅga あるいは nandi の姿で崇拝している)。

この Liṅgāyat の先駆者は、有名な商人諸ギルドからなる Vīra- Baṇaṅja たちであり、彼らは、12 世紀にはマハーラーシュトラ南部に存在しており、山 (山の姿で表された彼らのもともとの神) を旗印としていた。すなわち、シヴァ神とその化身である Khaṇḍobā 神を山の姿で崇拝していたのである。このことは、Khaṇḍobā 神の名前が、カルナータカでは Mallaya 等であり、また Murukan のタミル語の名称が malaikilavon (山の主) であるように、山と密接に関連していることから明かであろう。また、Khaṇḍobā 神に打ち負かされた悪魔 Malla も、おそらく山の霊であり、打ち負かした Khaṇḍobā の名前の中に取り入れられたため、Kaṇḍobā が Mallārī (malla の敵) とも呼ばれることになったものと思われる。また、このような Khaṇḍobā と Vīra-Baṇaṅja や Liṅgāyat との古いつながりは現在でも、彼の最初の妻が Liṅgāyat 商人カースト出身の Mhāḥsā であり、彼女の兄弟の一人が Khaṇḍobā の二人の大臣のうちの一人 (ちなみにもう一人は Baṇāī の兄弟) だとする伝承の中に残されているのである。

マハーラーシュトラ南部の Dhangar の神話の中では、「Liṅgāyat の師」五人のうちの二人 Revaṇasiddha と Maruḥasiddha が、特に大きな役割を果たしている。まず Revaṇasiddha は、Liṅgāyat、Kuruba、Gosāvī によって師 (ācārya) だとされ、そのうち Gosāvī は彼を九人のナータの一人だと考えている。一方、Maruḥasiddha は、Kuruba の神話の中では Siddarāmayya (彼は、Siddheśvar 同様、有名な交易センター Śolāpūr の起源と結び付けられている siddha = 超能力者である) と同一視されている。

商人 Liṅgāyat 同様、荒野と遊牧牧畜地域を旅して、部族をヒンドゥー化した社会集団には、「苦行者 Gosāvī」(たとえば Davryā Gosāvī、Kānphaṭā Gosāvī) がいるが、彼らは主に Bhairav 信仰を広めることでそうしたのである。そのため伝承の中では、シヴァ神が繰り返し Gosāvī として現れている。こうして Gosāvī は、Kālḥairav と密接に結びつき、その結果 Mhaskobā と密接に結びついた存在だとされるのである。またこの Gosāvī は、Sonārī (Pareṇḍā Taluka、Usmānābād District) の Kālḥairav 信仰 (Mhasvaḍ、Saṅgolā、Kharsuṇḍī、Ka-rande、Biḥūr、Jāvī、Vir の Kālḥairav 信仰はここから伝えられたものである) と密接に関連しており、そこでは遊牧牧畜の民の信奉する神々が、Kālḥairav 神と同一視されているのである。

第六章「森と遊牧牧畜の民：遊牧牧畜の集団」

「遊牧牧畜の民 Golla/Gavī」(Golla はアーンドラ・ブラデーシュでの名称で Gavī はマハーラーシュトラでの名称である) は、自らを Ābhīra 族の系譜を受け継ぐ者とし、Cālukya、Hoysala、Devgiri の Yādava 各王朝との戦いの歴史を伝える、長い歴史を持つ社会集団である。この Gavī の集団は、nagarkar (町の近くに住む者) と vrajarkar (vraja

に住む者。なお、vraja とは 牛飼、牛飼部落、牧草地、遊牧民の移動キャンプを意味する)の二つに大きく分けられている。そしてこの二分法は、アーンドラやカルナータカにも広がっており、たとえば Golla も、村 (Ūru) の Golla と森 (Kāḍu) の Golla の二つに大きく区分されている。彼ら Gavli/Golla のデカンにおける伝統的な職業は、家畜の飼育と牛乳やギーの生産である。

「遊牧牧畜の民 Kuruba」は南インドの歴史で重要な役割を果たした人たちで、マハーラーシュトラ南部にも大きな影響を与えてきた。その神 Birāppā/Birobā は、カルナータカからマハーラーシュトラに来たと言われており、アーンドラ・ブラデーシュにも見られる。同様に、Adimailār から Naḍdurg(Usmānābād District) にやってきたと伝えられる Khaṇḍobā(Mailār, Mallanṇa) 神も、Kuruba と Dhangar の神である。この Kuruba は、森 (Kāḍu) の Kuruba と町 (Ūru) の Kuruba に大きく分けられている。また、その他の区分として、羊毛腕輪 (Uṇṇi-kaṅkaṅ) の Kuruba と綿腕輪 (Hattikaṅkaṅ) の Kuruba という区分もある。だがいずれにせよ、これらの二つの区分は基本的には、森 (vana) と耕地 (kṣetra) という区分に基づくものである。

「遊牧牧畜の民 Dhangar」は、伝統的には Hāṭkar, Khuṭekar, Mhaskar の三つと半分 (Kāsā, 前三者に比べて少し地位が低いので半分) に区分されている。このうち、Hāṭkar Dhangar を取り上げてみると、その内部がさらに主に三つの社会集団に分かれている。そのうちのまず、Bargi は、もともとは狩猟と耕作に従事するカーストだとされ、現在でも Dhangar Vāghyā が運んで移動しているようなプランケットと鋤 (bargi) と狩の道具を保持し、また祭 (jātrā) のときには Khaṇḍobā の沐浴儀礼を行っている。次に、Hāṭkar は、hāṭ という語がまず第一に「家畜用の囲い」を意味し、付加的に「移動市場」を意味することに見られるように、牧畜に従事しつつ、行商をも行っていたのであろう。最後に Khilārī は、主に遊牧の Dhangar で、伝統的には羊やその他多くの家畜を所有したとされるが、現在では羊飼いのみに従事している。

第七章「遊牧の Dhangar のキャンプ二つの宗教的雰囲気」

ここで取り上げられる二つの季節的なモンスーンのキャンプ (vāḍī) のうち、キャンプ A は Jejurī (Purandar Taluka, Puṇe District) の東方にあり、B は Śiṅgṅāpūr (Phaiṭhaṅ Taluka, Sātārā District) にある。

そこで行われている祭「jātrā」は、Dhangar の神 (kulsvāmī) なかでも特に Khaṇḍobā や Mhaskobā や Birobā、およびこれらの神々と結婚した土地の女神たちを祭る祭である。これらの神々には、羊が供犠されるのであるが、その具体的な行為と伝承の中には、肉食の食物供養 (nived : SKT では naivedya) に反対する Viṭhobā 信仰 (Vārkarī 派) などの他の信仰の影響が読み取れる。

もう一つの祭「kheḷ」は、Dhangar にとってもっとも重要な祭の一つであり、そこには踊り、太鼓、憑依、預言、kulsvāmī と祖先に対する崇拝が含まれている。この祭で祭られる祖先は、食物供養など自分たちの欲望充足を主張する存在であるが、kulsvāmī に近い存在とされる傾向、あるいは kulsvāmī と一体化される傾向が認められる。

この *kheḷ*あるいは *jātrā* の時に重要な役割を果たす職能者 *devṛṣī* は、神の媒介者で、神は *devṛṣī* を通して *Dhangar* に語りかける。この *devṛṣī* として認められるには、定式化されたテストがあるのだが、このテストの様相がまず紹介され、さらに次に、キャンプ A で悪霊 (*bhūt*) に憑依された一人の *Dhangar* が、その *kulsvāmi* によって悪霊祓いを行ってもらって、*devṛṣi* となる過程についても紹介されている。また、*Vir* の *Mhaskobā* 寺院の *Dhangar* の *śid/siddha* の場合には、ここの事例とは異なり、祖先の霊に対する偉大な *bhakti* のおかげで、彼らは *Mhaskobā* 神に憑依される世襲的権利を保持しているのだということも指摘されている。

また、この地の伝承によれば、結婚や命名式などの通過儀礼 (*samskāra*) の場合には、司祭が以前は *jaṅgama* であったのが、のちにバラモンに変わっていったようである。さらに、*Birojī/Birobā/Tāyājī* という神の命名にバラモンの占星術師が関わったことを伝える伝承も見られ、神を同定し神を名声ある形で解釈するバラモンの機能と能力が、サンスクリット化を押し進めて行ったことも読み取れるのである。

第八章「マハーラーシュトラの風景の統合：農業の広まり」

まず、「*Devgiri* の *Yādava* 朝」の時期には、*Hemād Pant* (派) に属す寺院の広がり、*bājri* 耕作の広がり、マラーティー語の発生が認められるが、デカンはまだ依然として、遊牧牧畜地帯という性格を本質的には保持していた。そしてそのことは、家畜を守った英雄を表す多くのヒーロー・ストーンの中に反映されている。また、この時期には、*Hemād Pant* に属す寺院が、この頃に盛んになってきた *Khaṇḍobā* 信仰と結びつき、交易路(たとえば北から南)に沿って、多くの *Khaṇḍobā* 寺院が生じてきている。たとえば、*Nanded* から *Lāṭūr* への道にある *Mālegāv* には、*Khaṇḍobā* の寺院があり、*Campāsaṣṭhī* (スカンダ神の日) には、今でも祭 (*jātrā*) が行われて家畜や馬の市が立つのである。また、農業地域(たとえば *Godāvalī* 溪谷) と南部とのつながりはその頃、*Lamāṇī* ~ *Baṅjārī* などの伝統的な巡回集団が維持していたが、彼らは、*Jagadambā* 女神 (*Tuljapūr* の *Bhavānī* 女神) の寺院と密接な関係を持っており、飢饉のとき(たとえば *Durgā-Devī* 飢饉) には、外から食料を運んでくる不可欠な存在だったということが分かっている。

次に、「地方の *rājā*、*Nāik*、*Marāṭhā* の時代」には、5 ムスリム・サルタンの統治のあいだに、農業と徴税を遊牧牧畜地域に広げる努力が行われたものの、巨大な地域が遊牧牧畜と家畜飼育に基づく経済であり続けた。また徐々に、*daṇḍanāyaka* (もともとは王国官吏) の地位が独立した地方の支配者の地位へと変わっていった。同様に、部族の *Nāik* (戦士・王) も地方の支配者となっていき、地方の *peṭh* (交易の中心地) は、地方の独立した支配者(たとえば *Rāv Nāik Nimbālkar* など) の本拠地となっていった。その後、マラーター王国時代は、マラーターの戦士 *Sardār* と *śiledār* の支配の確立とともに、その地方の信仰(特に *Khaṇḍobā* 信仰) が広まっていった。この新たな *Sardār* と *śiledār* の多くは、遊牧牧畜地域の出身であった。たとえば、*Hoḷkar* (*Khuṭekar Dhangar*)、*Gaikvād* (*Gavḷī*)、*Śinde* (*pāṭil* あるいは *Gāuḍā*) などがそうである。この時期に、*Khaṇḍobā* 神、*Dhuḷobā* 神、*Kālḥairav* 神の信仰が広まり、通常は三叉戟・*damaru* 太鼓・頭蓋骨の鎖と

とも描かれる Kālbhairav さえもしばしば、馬に乗った Sardār あるいは śiledār の姿で描かれた。またこの時期、Māvaḷ 地方で、森が切り開かれて農業が広まった（たとえばそれは Śivājī の師である Dādājī Koṇḍev によって強力に推進された）が、Pune、Sātārā 以東の地域では、イギリス植民地時代になるまでは依然として、耕作に適した大量の土地と耕作に従事する人口の不足のアンバランスが続いた。そのためイギリス植民地時代にも、耕作を推進するような形で税制を工夫して、森林の開墾を押し進める必要があったのである。

ともかく、このような「農業の広まり」とともに、遊牧牧畜の民は徐々に牧草地を失っていき、農民へと変化していった。たとえば、Dhangar の伝承の中には、灌漑（たとえば Nirā 運河）や農業の広がりとともに、Gavḷī とその家畜の群れが土地を追い払われていったことを伝えるものがある。一方、Dhangar のほうは、Konkaṇ や Māvaḷ 地方に移住することを余儀なくされたものの、羊の群れを保持することはでき、かくして減少する牧草地で家畜の群れを維持できなかった Gavḷī に取って代わっていったのである。

このように Gavḷī と Dhangar のなかには農民へと変わっていたものの多かったが、その後も遊牧牧畜を続けた Dhangar のほうは、よりよい牧草地を求めて移住することを余儀なくされて、移住してきた農民に土地を明け渡すことにもなっていた。たとえば、ある村（Jejuri 近くの Loḷvihire）の伝承には、Vālmiki Koḷī（盗賊）の伝説の地方化された形のもので伝えられており、そこでは土地を追われた Gavḷī や Dhangar が、盗賊の Koḷī に加わっていったとされている。ともかく、彼ら遊牧牧畜の民の去った後に、jamīndār、Kuṇbī、Marāṭhā、Māḷī によって農業が広められ、そして彼らが遊牧牧畜の民の信仰を乗っ取っていったのであった。その結果、遊牧牧畜の民の神々は、すべてのカーストの神々へと変化していったわけであるが、これらの神々には今でも、もともとは遊牧牧畜の神であったという痕跡を認めることができる。たとえばまず、Khaṇḍobā 神の場合には、遊牧牧畜の民の女神 Bāṇāī との結婚にその痕跡が認められる。さらに、もともと Gavḷī によって持ち込まれた Mhasobā/Mhaskobā 神の場合には、そのことはより明確である。たとえば、Vīr の Mhaskobā の神を例に取れば、この地（Vīr）は Dhangar によってもたらされた神の到着ののちに繁栄したのだとする伝承が伝えられている。このことはおそらく、この地の土地の耕作のために、Dhangar が家畜を提供したことを意味しているのであろう。そしてここ Vīr では、Mhasobā/Mhaskobā 神は、女性を忌避する神であり、女性は寺院の中に入ること許されないというような形で、今でも森林・遊牧牧畜地域出身の神としての特質を備えているのである。だが、この神も、いったん村に定住するようになると、Yogeśvarī/Jogāī 女神と結婚し、Kālbhairav 神と同一視されるようになっていくことになる。また同様に、Khaṇḍobā、Birobā、Aīyaṇār、Mallaṇṇa、Murukaṇ、Mallikārjuna もまた、一方では部族の女性と、他方では上位カーストの「清浄な」女性と結婚して、すべてのカーストの神となっていたのであった。

第九章「Birobā、Mhaskobā、Khaṇḍobā 信仰の起源、構造、変容」

もともとこれらの信仰の「起源は精霊の世界の中にあった」。たとえば、*Mahā-māyūrī Mantra* によれば、Khaṇḍobā は、Paīṭhaṇ の地を守護する yakṣa（夜叉）であり、Birobā

は Karahāṭa (Karhād) 周辺地域の yakṣa であったとされている。すなわち、これら三神の起源は、yakṣa (山、河、木にすむ精霊) あるいは動物の姿の中に見いだすことができるのである。これらの精霊は、まず devī (女神) 信仰と結びつき、そしてより上位の定住カーストの神々と同一視されるようになっていく。これがこれらに三つの神々のたどった道なのである。そしてこの変容の過程の背後には、農業の森林と牧畜地域への広がり、それに伴うプラーナ的観念の広がりが認められるのである。

Mhasobā と Birobā は、一方では、十分に発達した宗派をとともなう有名な神としても現れてくるが、他方では、19世紀の *Poona Gazetteer* にも記されているように、依然として単なる精霊だともされる。また、Khaṇḍobā でさえも、形のない石の中に住む姿で今でも見られることがある。そして三神はすべて、過去においてもまた現在でも、山、丘、森林(すなわち遊牧牧畜の人々が家畜に牧草を食べさせる自然の土地)と密接に結びついている。たとえば Birobā は、māl (石の荒れ地)に住んでいるとされるのである。だが結局は、これらの神々は、山を去って谷に定住するようになり、女神と結婚し、図像的にも神話的にもさまざまな変化を受け入れていくことになる。また、三神はすべて、蟻塚に住んでいると考えられている。たとえば、現在 Naḍdurg にいる Khaṇḍobā は、カルナータカの Mailār からやってきたとされるが、そのもともとの地では最初は蟻塚に現れる。すなわちこの蟻塚が、この神の最初の mūrti (姿)なのである。また蟻塚は、一般に蛇の住処だ考えられており、そのためこの神は蛇の姿でも表される。この蟻塚はまた、羊 (Dhangar の富) の起源でもある。そのため蟻塚は、富の座とされて、黄金や太陽と結び付けられる。たとえば、Sūravantī (Sūryavatī、太陽の輝きを持つ女性の意味) すなわち Birobā の母が、黄金の小箱の中に見いだされるのも、蟻塚においてなのである。また、Khaṇḍobā と蟻塚と太陽のつながりは、彼が Mārtaṇḍa Bhairava (太陽神 Aditi の息子) であるという信仰によっても強められている。さらに、ターメリック粉 (bhaṇḍār) は、Birobā と Khaṇḍobā の信仰においては重要なものであるが、それは黄金であると考えられている。また、木の上にあるいは中に住む神々への信仰も依然として残っており、これらの神々のいずれから憑依された人は「神の幹」(devācī jhād) と呼ばれている。

シヴァの化身としての Khaṇḍobā の「vāhana (神の乗り物)」は、雄牛の nandīだが、この nandī自身がときとして Khaṇḍobā として崇拜される。また馬は、三神すべての重要な vāhana であるが、Khaṇḍobā はその馬を daitya (悪魔) の Maṇimalla から受け取ったと言われている。ここで言う malla とはおそらく、山の精霊か部族の王のことであろう。また Dhangar は、馬が山では風の姿で生きているだとも信じている。

Khaṇḍobā はまた、犬(それは Śvāsva としての Bhairava である)を伴う。そしてこの犬は、もともとは Baṇāī 女神が伴ってきたものと Dhangar は考えている。また Birobā は通常、mūrti (姿)を持たないが、その奉納される vāhana のほうは、他の二神同様、家畜や馬や雄羊などの多くの姿で表されている。このように、vāhana としての姿のほうは、この神が mūrti や liṅga の姿で表されるようになる前からあったものと考えられるのである。

このように最初は姿を持たない神々であったものに、「図像的姿が生ずる」ようになっていくのは、主に Gosāvī たちの Bhairav 信仰の影響だと考えられる。たとえばまず、Khaṇḍobā と Mhaskobā は、Gosāvī (特に Kānphāṭa Gosāvī) によって広められた Bhairav 神の概念

の影響のもとで姿を持つようになっていった。この Bhairav とは、荒れ地に入り、悪魔を打ちまかし、シヴァに代わって儀礼的不浄を自らに引き受けた神のことである。Bhairav は、荒れ地を耕地 (kṣetra) に変えて、その地を Kālbhairav 神として守護するのである。その後この Bhairav 神の概念は、daṇḍanāyaka やśiledār (地方の官吏や非独立の地方の王で、彼らは中央権力が弱まると独立する) の概念の影響を受けようになる。すなわちその影響で、Bhairav 神は、Khaṇḍobā として地域を守り、Mhaskobā として村を守る王としての属性を身につけるようになっていったのである。そしてこの Bhairav 神の支援を得て、王は勝利を得るのである。すなわち Bhairav 神は、王に戦いに必要な守護・鼓舞・熱狂を授ける戦士の神となったのである。またさらに、この Bhairav 神は、八方を守護する Aṣṭabhairav でもある。そしてこう考えれば、Yādava 朝の王 Rāmacandra が神格化されて Khaṇḍobā 神となったとされる伝承も、理解できるようになるのである。

また、自らを Kālbhairav 神と同一視して、三叉戟と damaru 太鼓を持ち運ぶ Gosāvī たちも、Khaṇḍobā 神の図像的な表現に貢献した。だが、Khaṇḍobā 神は、盾を持ち、剣あるいは三叉戟だけ振りまわす、馬にまたがった戦士としても表されることもある。すなわち、このような形で、Marāṭhā の時代の地方の支配者たちの姿も、この神の mūtri や衣服の姿に影響を与えているのである。さらにまた、Birobā と Khaṇḍobā は、52 の birudem (魔術のカルト物) を備えているが、この biruda という語は、支配者の呼称でもあるのである。

これらの三神は、先に述べたように、もともとは yakṣa (夜叉)、asura (阿修羅)、daitya (悪魔) という地位の低い神々から現れたものであるが、その後は次第に自らをこれら「劣った神々や精霊たち (kṣudradevatā) を支配する存在」として確立していった。なかでも特に、Khaṇḍobā と Birobā は、bāvan vīr (劣った神々や精霊を支配する者) と呼ばれ、それらが支配する者たちの 52 の姿を取ることができるとされている。なお、ここで言う vīr (vīra) とは、ヨーガによる超能力 (おそらく 52 vīra あるいは 7 siddhi) を獲得した siddha (超能力者) のことである。そのため、Mhaskobā 神の siddha たち (Mhaskobā 神が憑依する Dhangar のシャーマンたち) も、vīra と呼ばれるのである。また Birobā は、このような vīra を支配する神であると同時に戦士 (vīra) でもあり、カルナータカではヒーロー・ストーンという具体的な形をとって Bīra-(Bire-) Deva として崇拝されている。

「神の結婚」は、神々が、耕地に定住する者たちの神々の輪の中に組み込まれていく最終的な段階を表している。この組み込みは、神々をブラフマニカルなパンテオンの近くあるいは中に位置づけるもので、縁起譚の *Māhātmya* や *Caritra* の作成と同時に起こってくる。たとえば、Kānphaṭā Gosāvī と彼らの先駆者である Kāpālīka 派や Kālamukha 派は、神の結婚という仕組みを持っていなかったが、Gosāvī になると、自分たちの神の結婚を説明する伝説を持つようになるのである。たとえば具体的には、Vīr の地の Mhasobā 神は、Dhangar によってその地にもたらされたものだが、農民 (Kuṇḍī と Mālī) にも受け入れられて、現在ではバラモンがこの神の毎年の結婚式を執行している。また、Khaṇḍobā 神の場合には、その耕地への定住のさまざまな重要な段階が、この神のライバルがかつて活躍していたマハーラーシュトラ各地で、地方化されて残っている。たとえば、Jejurī では、Khaṇḍobā 神は daitya (悪魔) を打ち負け、Pāl (Sātārā District) では Mhāṣā

(Lingāyat 出身の Khaṇḍobā の妻) と結婚する。また、シヴァが daitya を打ちまかした Khaṇḍobā の姿を取るところもある。また、Pārvatī が Mhālsā の姿を取るところもある。一方、Birobā 神の結婚の伝承は、定住した農民の Dhangar の間だけで伝えられている。すなわち、Birobā 神は、本質的には、Dhangar と Kuruba の神で、森と遊牧牧畜地域の神であり続けたのである。

以上のことから、「結論」として言えるのは、次のようなことである。

これら三神の起源は 森林地帯と遊牧牧畜地帯にある。これらの神々の根本には、南インドの多くの地域に今も存在する神々がいるのである。すなわちそれは、森と牧草地の神であり、自らを山や蟻塚や木の上に、また蛇の姿で現す神々である。これらの神々への信仰の起源は、森林部族と遊牧牧畜集団の姿のない神なのである。これらの神々はしばしば、svayambhū として自ら生じた刻まれていない石として表現され、後には結局 mūrti として表されるようになっていったのである。また、vāhana としての崇拜・表現や、神の属性や象徴として表現(たとえば槍、旗など)のほうで、mūrti としての姿の前にあったものである。

また、sādū や Gosāvī やバラモンと、部族の長あるいは地方の支配者の影響も、もともとの森や遊牧牧畜の民の信仰を破壊することはなかった。それに新たな観念の層をつけ加えていただけだったのである。すなわち、自らを Kālḥairav 神と同一視する Gosāvī や、地方の長 (daṇḍanāyaka, śiledār) あるいは中央の支配者の影響を受けて、もともとの信仰の形やこの信仰に重要な影響を与えた他の集団(たとえば Kānphāṭa Gosāvī や Lingāyat 等)の持っていた観念と関連する Khaṇḍobā 神の姿は、その重要性においては後退していくものの、存在し続けたのであった。そしてここに、インドの文化に特徴的な基本的特質が認められるのである。すなわち、社会的に有力な集団からある時代に生まれた新しい観念や表現が、以前からあった他の観念を滅ぼすことなく、受け入れられていき、古い諸観念のほうは、たとえそれらが新たに解釈され直す(すなわち「バラモン化される」としても、また、一見して分かるような矛盾をその中に含み込むことになるとしても、存続し続けていくのである。(なお補遺として、『Śrī Nāth Mhaskobā の伝記 (Śrīnāth Mhaskobā Devāceṣṣ Caritra)』の翻訳が付されているが、この箇所については省略した)。

0.3 おわりに

以上、相当にまどろっこしい要約となってしまった(それは本書が理論的というよりはむしろ記述的なものだという点にもよるのだが)が、最後にいくつかの感想を述べて、この書評(あるいは紹介と言ったほうがいいのかもしい)を終わることにしたい。

私は以前に次のようなことを書いたことがある。「確かにインド学仏教学は、<サンスクリット語やパーリ語>で<書かれた><古典的な><哲学論書>の文献学的研究が主流であり、そのことは当然のことながら、<アーリア文化>・<文献>・<古代>・<教義>の研究が中心で、<非アーリア文化>・<フィールド>・<中世以降>・<歴史的動きのなかの思想>の研究はあまり行われてこなかったということの意味している」[Shima

1985〕すなわち、今後は、アーリヤからドラヴィダ等の非アーリヤへ、文献からフィールドへ、古代から中世・近現代へ、教義のみから社会経済史の動きも押さえた思想史研究へと、インド学も動いていくべきであるという主張である。

このような主張に基づいて、古代から中世へと動いてみるとまず突き当たったのがマラーティー語の壁であったということについては「はじめに」ですでに述べたとおりであるが、一方、文献からフィールドへと動いてみたときに突き当たったのが、言葉の壁は別にすれば、インド学でのヒンドゥイズム理解と文化人類学でのヒンドゥイズム理解との相違である。すなわち、分かりやすく言えば、インド学側のヒンドゥイズム理解はバラモンから見た理解の側に傾いていてかつ歴史的・記述的なものであり、一方、文化人類学側の理解は村人たちの目によるヒンドゥイズム理解の側に傾いていてかつ構造的・理論的なものであって、両者の間の橋渡しというのが意外に困難なものだということに気づくことになったのである。

そこで、このような関心から、本書を読んでみると、Dhangar の口承伝承をテキストとして読み込んでいくという本書の方法は、インド学の側にも、サンスクリット文献に基づくという意味でバラモンから見たヒンドゥイズム理解から、比較的自由的なヒンドゥイズム理解の可能性があり、また、文化人類学的ヒンドゥイズム理解とも理解を共有しうる可能性もあることを、示しているように思えるのである（なお、このような形の新たなヒンドゥイズム理解の可能性については、[Sontheimer and Kulke (eds.) 1989] 参照のこと）。そして、このような方法（フィールド・ワークに基づいて口承伝承等を扱うというだけでなく、中古マラーティー語文献を扱うということも含む）が、有効なものであり、ヒンドゥイズム研究の新たな分野を形成しつつあるということは、ゾーンタイマーの弟子たちの最近の活躍を見れば明かであろう [Feldhaus 1983:1984:1995 および Jansen 1995 等] また日本でも、永ノ尾氏が、ミティラーをフィールドとして、最近精力的に口承伝承を収集しているのは、注目に値するところであろう。

ただしこのような方法に基づくゾーンタイマーの Birobā、Mhaskobā、Khaṇḍo-bā 理解は、基本的にはインド学的な歴史的・記述的・実証的理解であり、文化人類学の側から言えば、それらの神々の変容とその信仰の重層性を成り立たしめしているメカニズムや構造についてもっと理論的に明らかにしてもらいたいという不満は残ることだろうし、また、歴史学の側からも、森 (vāna) から耕地 (kṣetra) へという時代変化の大枠は、文明を牧畜、農耕、都市に三分するようなやり方にも似て、あまりにも大枠すぎるのではないかという不満も残ることになるだろう。にもかかわらず、これまでのインド学側からのヒンドゥイズム理解から言えば、本書は、新たな理解と研究領域を切り開いた画期的なものだと言えるはずだと、私には思えるのである。

そんな訳で私も、これに似たことをいづれやりたいという希望をもっているのだが、「はじめに」で触れた 1985 年 2-3 月に巡ったマハーラーシュトラの聖地と神々のうち、本書の中で扱われている Jerrjūrī の Khaṇḍobā や、Paṇḍharpūr の Viṭhobā [Deleury 1960]、Cincvad の Gaṇapati [Preston 1989]、Tuḷjāpūr の Bhavānī [Jansen 1995] はもうすでにやられてしまった。ここで現在では、Nāsik の Saptasringī か Kolhāpūr の Mahālakṣmī を、人にやられる前になんとかしなくてはと考えているところなのである。

[書評を行った本]

Günther-Diez Sontheimer, *Pastoral Deities in Western India* [*Bīrobā, Mhaskobā und Khaṇḍobā*], tr. by Anne Feldhaus, Oxford University Press, New York and Oxford, 1989, pp.xiv + 278.

[参考文献]

Deleury, G.A.

1960 *The Cult of Viṭhobā*. Poona: Deccan College.

Feldhaus, Anne

1983 *The Religious System of the Mahānubhāva Sect*. New Delhi: Manohar.

1995 *Water and Womanhood: Religious Meanings of Rivers in Maharashtra*. New York and Oxford: Oxford University Press.

Feldhaus, Anne (tr.)

1984 *The Deeds of God in Rddhipur*. New York and Oxford: Oxford University Press.

Feldhaus, Anne and others (eds.)

1997 *Kings of Hunters, Warriors, and Shepherds: Essays on Khaṇḍobā by Günther-Dietz Sontheimer*. New delhi: Manohar.

Jansen, Roland

1995 *Die Bhavani von Tuljapur: Religionsgeschichtliche Studie des Kultes einer Göttin der Indischen Volksreligion*. Stuttgart: Franz Steiner Verlag.

小磯千尋

1992 「千尋のインド便り：ゾーンタイマー博士を悼む」『インド通信』167、pp.2-3。

Preston, Laurence W.

1989 *The Devs of Cincvad: A Lineage and the State in Maharashtra*. Cambridge: Cambridge University Press.

Shima, Iwao

1984 *Hindu Temples at Shaniwar Peth in Pona* (昭和58年度文部省科学研究費特定研究成果報告書)

1985 「回顧と展望(インド古代)」『史学雑誌』94-5、pp.269-272。

1988 "The Viṭhobā Faith in Mahārāṣṭra — Viṭhobā Temple at Paṇḍharpūr: Its Mythological Structure", *Japanese Journal of Religious Studies* 15:2-3, pp.183-197.

Sontheimer, Günter-Dietz and Kulke, Hermann (eds.)

1989 *Hinduism Reconsidered*. New Delhi: Manohar.

「書評：Günther-Dietz Sontheimer 著 *Pastral Deities in Western India*」『マハーラーシュトラ』4号、1998.07、pp.63-85。